

## 遠藤周作『青い小さな葡萄』論

—△書く▽ことの意味をめぐる—

### 一 はじめに

作品『青い小さな葡萄』（一九五六・一―六月「群像」連載）の作品結末部は、次に引用する作中人物△伊原▽の決意で閉じられる。

△一人になった伊原はふたたび雑踏のなかにはいつていった。ながい苦しかった四日間のうち、彼は同じような群衆に幾度かぶつかった。粉雪のふるパール街を傘を斜めにさしてくたびれた表情で歩いていく人間の河。あの時、俺はその河に青い葡萄を求めるむなしさを感じていた。だが青い葡萄とは何処かにあるものではない。さがすものではない。創るものなのだろう。ハンツには逃れていく教会がある。が、教会のない俺は創るしかないのだ。（何によって創るのだ）と彼は自分の小さなノートを思いだしながら考えた。（書くことか、その時、書くことはあのフォンスの闇の井戸も、もはや犯すことのできない一つの世界を創ることだろう。それはスザンヌやすべての人間の運命に反抗する一つの路なのかもしれない）

火花は夜の空を高く上りそれは無数の火花を散らせながらくずれていった。けれどもその光だけは大空をつきぬけ、どこまでも上昇

桂 文子

しつづけて消えることはなかった。▽（引用①）

△伊原▽は、渡仏以来、現実世界の一切に△幻影▽を見、分断された人と人とのあいだには通路など見いだせないで、傍観と逃避で処理しようとしてきた。その△伊原▽が、△青い葡萄▽探しの旅の到達点として永遠に通じる世界を創造することの重要性に覚醒するにいたったわけだが、その際に、△伊原▽は△書く▽という方法を獲得している。こうした、作品結末部に示された△伊原▽の到達点は、そのまま作品の到達点すなわち作品主題の帰結となんらかの形で大きく関わっていると考えられる。つまり、本作品は、創造すること、とりわけ△書く▽ということの優位性を示した作品であると受けとめることが可能である。

ところが従来、先行研究においては、作品結末部の△書く▽ということの意味及び作品主題との関係が必ずしも明確にされていない。むしろ、そこに着目して疑問を提出しているのは、同時代の文学者たちである。たとえば、作品発表まもなく「群像」紙上で行われた「創作合評」<sup>1)</sup>のなかでは、△青い葡萄▽を△創る▽ということと△書く▽とということとがどのように関連しているか、△創る▽という伊原の決意

は「創作」ということなのか、あるいは「神を求める能動的な意志と行為」ということなのかという、解釈をめぐる議論が展開されている。その概要をまとめるならば、「伊原」は「創作」ということに「神を求める能動的な意志と行為」とを考えているのであって、「小説を作る」という意味じゃない」とする山本健吉、本当は「創作」ことに重点があるのだから、「伊原」のノートを参看すると創作ともとれ、「曖昧」であるとすると小島信夫、「伊原」の場合一応神の問題は除外されており「書く」ことに創造を求めるというふうにとった」とする山室静の三つの立場に割れている。

山本健吉と山室静の対立は、山室が「ハンツ」にとっての「青い葡萄」と「伊原」にとっての「青い葡萄」とを厳密に分けて考えているのに対し、山本は、作家遠藤の立場を「伊原」の立場とまったく同一視していることに起因する。先行研究は、概ね山本の立場と一致を見ている。論者の見解は山室の立場にもっとも近いが、しかし山室の言う「ドイツの観念論者が考えてきたような」創作至上主義であるとは思わない。

このように、現在研究者の間で問題とされることのない、結末部における解釈が、同時代かなりの比重を以て議論されていた。もちろん、作家が必ずしも同時代に理解され、受け入れられるとは限らない。むしろ遠藤は、ほとんどの作品が同時代評価において、かなり辛辣に酷評されることが多く、本作品においても、同時代の読者には測定不能であったことが、後年に至って理解可能となった可能性も充分考えられる。しかし、同時代評において提出された問題は非常に重要な問題であり、むしろ無神論者「伊原」を無条件に作家遠藤に重ねたり神

学者「ハンツ」の問題と緋い交ぜにしてとりだされた解釈に、作品を曲解する危険性が宿っているのではないだろうか。

よって、ひとまず伊原と作家を切り離したうえで、「書く」という決意の意味の確定、及び、「書く」と「創作」ことの関係を明らかにする必要があるだろう。

## 二 二篇の手記

ところで、従来「書く」ということが問題とされる場合、抗独運動が、その裏面で行った虐殺行為の舞台となった「フォンスの井戸」を凝視することによって大きく変化した「伊原」の内面が語られる場合と、本稿冒頭に引いた部分とを、連接させて解釈されてきた。その、「伊原」の内面の変化を次に引用して示す。

「その背後には伊原が名づけることのできぬもっとも巨大なもの、もっとも怖い冷酷なものがうずくまっているのだ。井戸の中に腐り、ねじくれ、転がっている死体はたしかに伊原に怒りを教えた。恨みではない。今日まで黄色人として日本人としてリヨンの町で彼がもちつづけたのは、あの夜毎、ローヌ河から這いまわる霧のように湿った恨みだった。だが、今、彼はこのフォンスの井戸に怒りを感じていた。」

（だが、その怒りもどうにもならないだろう）と彼は考えた。（スザンヌ一人の運命ならばそれでスムかもしれない。だが、その背後にある、もっとも巨大な怖いものには、俺たちはただ諦めるほかはないのだろうか）（引用②）

ここから、先行論は、「伊原」の、悪にたいする「怒り」を読み取り、

その△怒り▽が、△書く▽ことの原動力になったのだとの理解を示している。

ところが、さらにこの直後に△伊原▽は、△暗褐色の枯葉▽の中に潜り込もうとする△蜘蛛▽を、△突然黒い衝動にかられ▽て叩き潰している。つまり、井戸を見ることで覚えるに至った△怒り▽は、作品結末部の創造へむかうような建設的な性質のものではないのである。

むしろ△伊原▽が井戸を見ることによって覚えた△怒り▽とは、△悪▽に対する憎悪とそれを如何ともしがたいもどかしさが誘発した、△伊原▽の内面に潜んでいた破壊の衝動の発露であったといえる。

この、△黒い衝動▽が挿入されているために、△伊原▽は再び△諦め▽の側にひきずり込まれそうになりながらもそこから抜けだして創造にむかったのだと単純に△伊原▽の内面をたどることが不可能となる。つまり、△伊原▽の内面の変化を綿密に追って行くと、引用①は、引用②における内面の推移の延長線上にある必然的帰結としては、少し不自然であるといわざるをえない。

このように、結末部の△伊原▽の決意は、その直前に布置された△フォンスの井戸▽を凝視する場面における△伊原▽の内面との連鎖が、必ずしも滑らかに流れて行われているとは言えないために、△伊原▽が重要な決意を行っているにもかかわらず、最終場面はその直前の場面との間に断層が認められ、△伊原▽の内面の軌跡がたどり難くなっているのである。△書く▽という△伊原▽の決意内容に関して読者に自然な理解を促すものとなっていない原因も、このあたりにあるのかもしれない。

しかし、本作品が、全体に、隣接する物語切片相互の関係が意図的

に断ち切られることによって構成されているという特質を鑑みたとき、直前の場面との間に断層があることそれ自体は、むしろ構成上は自然なことなのではないか。だとすれば従来のように、作品結末部だけを限定的に取り出してきても、解決には至らない。作品の全体性の中で△書く▽ことの意味は規定されるべきであり、それが達成されて初めて△伊原▽の最終的到達点、すなわち作品の帰着点がどこにあるのかを見定めることが可能となるであろう。

その際に着目したいのが、作品内部に布置された二つの手記とそれを布置する際に生じた、△青い葡萄▽を探しに行く物語との位相差である。遠藤の作品には、手記や日記といった、作品全体の語りとは位相を異にするモノローグの物語切片が挿入されることが多いが、作品『青い小さな葡萄』においても、△青い小さなノート▽と命名された△井原▽のノートと、△フォンスの井戸▽と題された△モンドン▽の手記という、二篇の手記が挿入されている。本作品が、△書く▽とこのことの優位性を示した作品であることを考えたとき、そのような主張をしている作品のなかに、△書く▽ことによって生み出された切片が、位相の異なる形で挿入されていることは気に掛かる。これら書かれたものと伊原の△書く▽という決意とは、引用①の中で両者が関連性を持たされていることから、無関係でないと思像される。だが、寧ろそれ以上に、作品世界の中で一つの独立した閉じられた世界が、書き手や読み手、すなわち書かれたものの外部に位置するものにとっていかなる意味や機能をはたし得るのかということをお作品内部において明らかにしている可能性が高いということが、重要である。

のみならず、△モンドン▽の手記は、△伊原▽に△フォンスの井

戸∨の存在することを知らしめ、井戸を探しに行く直接のきっかけとなつてゐる。それは取りもなおさず、△伊原∨の変化の直接的原因となつたと理解してよい。さらに、△モンド∨の手記は伊原の到達点である△書く∨という行為の優位性をも強調している。よつて、作品結末部を解釈し、ひいては作品のテーマを同定する上で、△モンド∨の手記は看過することは出来ないだろう。

一方、作品の冒頭近くに配置された△伊原∨の△青い小さなノート∨にも△書く∨ということが問題意識の中心にあり、△伊原∨が作品冒頭部で指向した△書く∨という行為と、結末部においてあらためて指向した△書く∨という行為との間にいかなる関係があるのかという点も、気に掛かることである。

この、二篇の手記の機能を説明し、作品内部に位置付けることによつて、従来とは別の視角で本作品を位置付けることが可能であり、その位置付けは、遠藤文学の初期の世界を説明する重要な手掛りを与えるのではないかと論者は考へる。そこで本稿においては、二つの手記を作品全体の中で有機的にとらえううえで、作品の結末部における意味を問いなおしてみたい。

### 三 △歴史∨と△集団∨

それでは、まず、△モンド∨の手記に書かれた内容について検討して行こう。内容を大きくとらえるならば、たしかに先行論も指摘しているとおり、抗独運動という正義に陰在している暗部を暴露するということである。先行論においては、△悪そのもの、罪の源泉への認識<sup>⑤</sup>、△悪∥人間本性において、人種上の優劣はなく、存在論的に平

等となる<sup>⑥</sup>、△自分をも含めた人間が内包する「罪」そのものを告発している<sup>⑦</sup>といった位置付けがなされている。

しかし、ここで注意したいのは、△伊原∨が、抽象化・一般化した観念世界に安寧を求めつつも、△青い葡萄∨の世界や、△伊原∨のノートに書き記された△小説方法∨が逃避であり欺瞞にすぎないということとを自覚している点である。これは、△伊原∨個人の自覚にとどまらない。△コビット∨という告発者の存在によつて、作品全体において、個性を排除した抽象的世界で問題状況の解決を図ろうとすることは逃避であるとして鋭く批判されており、その背後に、作者の姿勢を見ることが可能である。

もし、抗独運動の裏面を暴露することが、先行論の規定したように存在論的に平等な、人間そのものに内在する悪を提示することであるならば、それは、△伊原∨や△ハンツ∨のような、宗教や文学による抽象化・一般化の対極、すなわち、人間はすべて悪を内在させた存在であり、その意味において存在論的に平等であるという、負の面での一般化に他ならない。抽象化、一般化することによつて解決を図ろうとする姿勢を否定するという本作品の側面を考慮に入れるならば、負の面において抽象化された世界が△伊原∨の変化に決定的な要因となるとは考えにくい。

また先行論のように、人間の罪というレベルに還元してそこに存在論的平等をみるのであれば、△コビット∨のさし示した世界との差は、必ずしも明確ではない。△コビット∨もまた、平和や民主主義思想や宗教、善意によつて、過去の出来事として葬り去られようとしている拷問の事実を暴露している。隠蔽された人間本性における悪を暴露する

ということが△フォンスの井戸▽の内実の全てであるならば、△コピト▽の指し示す世界と△フォンスの井戸▽の指し示す世界は、等質であるといわざるをえない。もしそうであるならば、他ならぬ△モンドン▽によって、△伊原▽の変化が達成された理由は説明できない。もちろん暴露するという要素も重要ではあるが、△フォンスの井戸▽の指し示す中に、△伊原▽の変化の秘密を明らかにするような、もっと別の重要な要素があるのではないだろうか。

ここで注目したいのが、△書く▽ということの強調である。そこで、△モンドン▽の手記において、△書く▽ことに言及した記事を一日分抜き出してみよう。

△私は、一人の記者として、この二つの恐怖の町ヴァランスとオウヴナの事実を記事に書く決心をした。やがて解放が訪れ、仏蘭西の抗独運動は苦しい正義の勝利を証明するであろう。そしてアルデッシュの闘志たちも、その名誉に加わるであろう。シャルドン、ベルナル、アントワヌその他、人間の善意と威厳をまもる為に犠牲となつた本当のマキたちこそ、その祝福を受けるべきである。だがあのピションが、ただ歴史家の歴史のために政治の効果性と類型化のためにも多くの誠実な抗独運動者が流した血の栄光をわがものにしたことは私には我慢ができない。恥ずべき汚点は直視せねばならぬのだ。真実を語るといふことは勇気のいるものである。だが書くというところが真実を伝えるのでなければ、そこに何の意味があるろう。▽(引用③)

たしかに前半部分は、正義の裏面に隠蔽されたもののあることを示している。しかし、後半部分において批判された、△歴史家の歴史▽、

あるいは△政治の効果性と類型化▽とは一体何であるか。△モンドン▽の手記のなかに引用されたブロンベルシェの言葉に、その回答を求めることが出来る。

△「私たちは多少の悪すら伴わない絶対善など考えるほど乳臭い年頃ではないだろう。もし私たちが抗独運動を通して歴史を創っているなら、歴史は悪をも利用するのだ。今はまだ戦の途中だ。戦の時には眼をつむらねばならぬ最少の悪は伴うものだ」

「最少の悪？」私は驚いて叫んだ。「その最少の悪が抗独運動の純粹さを穢すことになる」「だが、モンドン、今、君がピション派の悪を暴露すれば、我々は民衆に対する威信を失うことになる。それは独逸協力派に利用される材料を作るだろう」(中略)彼はあの政治行為の効果性のために人間の魂を売っているのである。▽(引用④)

なにか目的をもった集団が、その目的を遂行しながら△歴史▽を紡いで行くとき、その目的の達成を阻む要因を排除するためには、いかなる手段も必要悪として容認されてしまう。というよりは、容認しなければ、その目的は達成されない。だから、ある目的が決定されると全ては目的が達成されるか否かという基準ではかられ、そこから逸脱するものは、たとえいかなる善きものであっても、異端的発想として排除される。その反面、いかなる悪を伴うようとも、集団の目的に合致するものが採用される。そうすることによって、統一と秩序が形成され、強化されて行く。これが、△歴史▽や△集団▽、ひいては△正統▽と呼び慣らわされているものの本性である。たとえいかなる崇高な理念をかかげた△集団▽も、このメカニズムから自由ではあり

得ない。そのことを認識したとき初めて、△モンドン▽は、そこに理不尽なものを感じ、△書く▽という方法によって△真実を伝える▽決意をしたのである。

もっとも、△モンドン▽の手記は、引用③が書きはじめではない。

この認識に至るまでも△モンドン▽は、六日分の手記をしたためており、しかも、手記の冒頭は△真実を打明けるのは勇氣のいることだ。しかし語ることがが真実を伝えるのでなければ、そこに何の意味があるか▽（引用④）という書き出しで始まっている。つまり、△書く▽という決意にまでは至っていないものの、引用③の末尾に酷似した決意を表明しているのである。

しかし、引用③において、△歴史▽や△政治の効果性・類型性▽を告発する手段として△書く▽ことが想起されていたのに対して、引用④では、△悪への憎悪が逆に悪を生んでいる▽という事実及び、△人間間の正義の象徴▽と考え続けてきた抗独運動が、△醜い人間本能、権力闘争の前に汚れつつある▽という事実を告発するために△語る▽ことが重要だと考えている。△歴史▽や△集団▽のもつ統一と排除に関する言及はまったく見られない。

つまりこの手記を執筆しはじめた当初、△モンドン▽の批判意識は、人間の内奥に潜む悪しき部分にのみ向けられていたのである。ところが、批判、告発して行くうちに、次第に、△悪▽の根底には、引用③に示した△歴史▽や△政治の効果性・類型性▽が横たわっていることを知る。それを知ってからの△モンドン▽は、△集団の善と個人の善との食い違いをどのように調和するのか▽という問題に煩悶しはじめ、自己を取り巻く状況に、嫌悪を感じるようになるが、そうした経緯を

経て、はじめて△モンドン▽は△書く▽ことを批判の手段、抵抗の手段として明確に位置付けするに至ったのである。こうしてみると、やはり△モンドン▽の手記において、△書く▽という行為と連動したもっとも重要な要素は、△歴史▽と△集団▽の問題であったといえよう。

△歴史▽とは、人為的に構築された疑似時間である。問題は、政治的な活動にのみとどまらない。我々を取り巻く世界は、多かれ少なかれ、疑似時間を紡ぎだす過程における、排除と統一の原理によって形づくられ、秩序立てられている。換言するならば、秩序や日常の体制といったものの安定、統一、秩序は、一本の疑似時間（△歴史▽）を作り出すことによって、そこからはみ出るものをすべて陰にさせたり、異端として排除するという巧みな操作によって成立している。

モンドンが告発しているのは、人類の栄光の背後に陰に隠した世界を暴くというだけではなくて、秩序や統一性は、疑似時間をつくる際の選択と排除という作用が働いて保たれているということであり、それを告発するために、△書く▽という方法を選びとったのだと考える。

#### 四、時空間をこえて

しかし、ここで、作品内部において、△書く▽ことが、決して社会を変革したり、正義を回復したりはしない点に注目したい。△伊原▽が目にあたりにしたのは、社会を変革するどころか、むしろ△書く▽ことによって社会から葬り去られ、△醜悪な▽酔っ払いと化した△モンドン▽の姿であった。手記のなかで△モンドン▽がめざした、△書く▽ことこそ△真実▽を伝え得るといふ崇高な理念は、作品内部において潰え去り、△モンドン▽は、その結果、△裏切者▽の位置におか

れ、酒に溺れ、△憎しみ▽をのみ糧として生きている。つまり、結果から見れば、△モンド▽の△書く▽という行為は、△モンド▽自身を零落させてしまったことになる。これは、理想や善といったものは虚偽、△幻影▽にすぎないのだという伊原やコビトの考えをむしろ証明するものであり、△書く▽ことの優位性は見出し得ない。

使命感あふれるかつての△モンド▽と、作品時間現在の△モンド▽像とのあまりにも大きな落差は抗独運動という合目的集団が△モンド▽の選択を義としなかったため、彼を△裏切者▽として排除したことによって生み出されたものである。つまり、△モンド▽の△真実▽を希求する心は、正統としての抗独運動からすれば異端的発想であったから、△モンド▽は抗独運動から排除された。△真実が今日、彼等に証明された以上、わしはウソを書いたのじゃないか。でなければ社会から、新聞社から、仲間からわしが追出される筈はないじゃないか。裁かれ、除け者にされそして今日こうして飲んだくれの老人ができる筈はないじゃないか。▽という現在の△モンド▽の嘆きは、体験から強制された△真実▽とは、相対的なものでしかありえないという苦い経験であった。しかし、このように、△書く▽ことの無力さをまざまざと見せ付けられながらも、△伊原▽が△書く▽ことを指向したのはなぜだろうか。

たしかに、現在の△モンド▽に焦点を当てるならば、△書く▽とすることはなにかを生み出すどころか、結果としての△モンド▽の零落を生み出した。しかし、△モンド▽像の落差そのものに焦点を当ててみると、△書く▽ことの重要な機能を抽出することが出来る。

こうした落差を生み出したのは、ほかならぬ△書く▽という行為である。つまり、

1 △書く▽ことが、結果として像の分離を生み出し、△時間▽のいかがわしさを露呈した。

2 △書く▽ことで、時間に意味付けられる以前の△モンド▽像が、保持された。

という二重の意味において、△書く▽という行為が重要な役をはたしている。書かなければ、時間のいかがわしさは隠蔽され、抵抗運動は△歴史▽の栄光に輝いていたであろう。また、書かれた手記が読まなければ、△モンド▽の選択も選択の意図も闇に葬られ、我々の目には、酔っ払った醜悪な男のみが映しだされるにすぎない。

すでに△モンド▽の手記を読み終えて、彼の視点をとりこんだ△伊原▽には、この落差の意味するところが見えたはずである。もちろん、△伊原▽は△モンド▽の手記に書かれた内容そのものにも充分触発されたであろうが、△伊原▽に大きなインパクトを与えたのは、実はこの落差ではないか。

行為が選択された瞬間は、常に、未来にむかって開かれた状態であり、その瞬間に人間の美しさがある。しかしそれは、はかない。なぜなら、人間は、時間と状況に拘束された存在であり、その呪縛から逃れることは出来ないからである。しかし、△書く▽ことによって、その呪縛からの解放が可能となる。なぜなら、△書く▽ことで、我々の行為や選択が△時間▽の経過によって意味付けられてしまう前の姿を保持できるからである。

実は、虚偽は、瞬間の行為の選択を歪めてしまう△時間▽のうちに

こそある。たとえ選択は崇高な意志に基づくものでも、意味付け、秩序化してしまうことによって、そこからはみ出してしまふものをすべて異端者としてしまふいかかわしさが、△時間▽には内在しているのである。しかし、△書く▽ことは、時空間によって歪められたり相対化されることのない、ある種の絶対性を有した世界を保持することが可能である。全てのものに△幻影▽しか見出し得なくなっていた△伊原▽にとって、この発見はいかにも大きなものであっただろう。こうしてみると△書く▽ことによって可能となる、現実を異化する別の時間と別の視点の導入によって生じた位相差こそが、△真実▽と△永遠性▽を我々に提示し得るといってよいだろう。

しかしそのためには、いずれかの視点のみが特権化されることがあってはならない。たとえそれが崇高な選択をしつつある△モンドン▽像であっても、その視点を特権化してしまえば、位相差は解消されてしまう。分離した像のどちらにも同等の重量を与えたとき、すなわち、手記に示された△モンドン▽も、眼前にいる、△時間▽に意味付けられた△モンドン▽も、いずれも同じ重さと現実味を与え得たとき、初めて△犯すことのできない一つの世界▽を△創る▽ことが可能となるのである。

このことは、△ブロンベルジュ▽が△未来だけが裁くことの出来る裁判▽と称して、△伊原▽に告げている次の箇所からも推察できよう。△そのいずれを選んだかは人々の自由だったろう。だが、歴史というもの、一度使ったものも必要としなければ、すぐそれを悪とみなす力を持っている。私の言うのはその歴史の裁判だ。コミュニストたちだけがそれを知っている。(中略)抵抗運動だって同じことだ。

私たちがヴィシー政府を選ぶか、ナチに抵抗するかを、決めるのがそんなに易しかったと君は思うかね。今だから人はペタンを間違ったと言えるのだ。

スザンヌという娘も今更詮議だてるのはよした方がいい。彼女はロワイヤス墓地に葬られたままにしておくべきだ。君がもし、そうした非情なものを背負いきれぬなら。▽

どちらが良いか悪いかわからない。今、△ピション派▽の抗独運動が讃えられていることによって△モンドン▽は非とされている。しかしここでもし△モンドン▽を是とするならば、現段階においては是とされている△ピション派▽は非となる。△善と悪との基準▽を定めようもない、つまり△道徳▽では処理しきれないようなレベルにおいては、善悪は、相対的なものとならざるをえない。そして、その相対的なものをとりあえず善悪に分けてしまうのは、△歴史の裁判▽という△非情なもの▽である。それは、背負うにはあまりに△非情▽であるから、△ブロンベルジュ▽は、そのままにしておけという。

どちらの選択肢にも同じだけの重みがあるからこそ、このような、価値の相対化が起こるのである。だから、一つの限定され特権化された視点を回避し、同じ重さで示すことによって、そこに生じるずれを示し得たとき、個のレベルでの真実を、顕現することが可能になるのである。

そもそも△伊原▽が△青い葡萄▽探しの旅に向かいはじめたのも、△ハンツ▽の語りによる無償性を帯びた△スザンヌ▽像と、△コピト▽の示す△スザンヌ▽の運命の落差を認識したときである。こうしてみると、△伊原▽を諦念と逃避から△創造▽へと駆り立てた原動力

は、△時間▽の経過によって生じた像と書かれた像との分離ということになる。

## 五 △書く▽こととの優位性

しかし、△伊原▽は△ハンツ▽の示した△スザンヌ▽像と、自己の想像した△スザンヌ▽像との間に、像の分離を見出しながら、その時には、そこにやはり△幻影▽を見てしまい、行為に向かわない。それは、なぜだろうか。

実は、△伊原▽は、その逸話を聞かされたその瞬間には、素直な感動と共感を覚えている。しかし朝が来ると同時に疑念が差し挟まれ、いったんここで△伊原▽は△ハンツ▽の△青い葡萄▽探しから手をひく。ここに疑念の差し挟まれた理由は二つ考えられる。

まず第一に、時空間をこえた保持が可能であり、別の視点の導入が可能であった、手記とは異なり、△話す▽という語りの方法は、瞬間的な感動を生み出し得ても時間的持続に耐えられない。口語りでは、時が立てば、その時△真実▽であると思われたことも、過去においやられ、現在の視点で回想されてしまい、その結果、聞いたその瞬間は美しかった世界が、△時間▽にとりこまれ△幻影▽と化してしまうのである。つまり、△時間▽を超越した保持が可能なのは、内部に別の時間の枠組みをもつ、書かれたものだけなのである。

そして第二に、△話す▽という方法では、△スザンヌ▽の行為は△ハンツ▽の視点というファクターをおしてのみ△伊原▽に伝えられるという点があげられる。ここでは、すでに語り手と語られるものとの間に距離が生じ、語られる△スザンヌ▽の内面や動機は外面から見

た推測の形でしか示し得ない。つまり△ハンツ▽の語りによって示されたのは、△ハンツ▽自身のある事件にたいする受け取り方が提示されたにすぎず、そこに視点の移動や位相差は生じ得ない。このような、絶対善を一元的に示す方法は、本来、相対的価値しか有していない、それ以外の生の在り方を、肯定したり否定したりする力を持ち得る。それは、△歴史▽や△時間▽と同様に、ある価値基準を最上位に置き、生の有り様を否定して行く原動力にもなりうる。それに対して△書く▽という行為は、視点の限定を回避して、多面的に世界を把握することを可能にするのである。内面と外面の分離、主観像と客観像の乖離は人間の認識の限界をも意味する。その限界に挑戦するためには、多面的に示すことが有効な方法である。

これが、口語りでなくて、ほかならぬ△書く▽という行為に優位性が与えられている理由であろう。つまり、△書く▽ことのみが、時間による統合を阻むとともに、複数の視点を導入して客観像と主観像との分離を鮮やかに提示し得るものとして、作品のなかに示されているのである。口語りでは、客観像と主観像の落差がたとえ示し得たとしても、時間の経過とともに主観像は曖昧なものとして行き、両者の分離が十分に示されない。少なくとも作品の内部では、△書く▽ことと△話す▽こととの関係は、そう示されている。

作品の細部を個別にみて行けば、たしかに人間の内部に陰在した悪しきものを暴き出すということは作品のなかで重要なモチーフである。しかし、単なる暴露、単なる悪の絶対性の顕示だけでは、決して△創造▽へと結びついては行かない。今迄の論理から行けば、善（もしくは聖）なるものと悪しきものとが等価に示し得たとき、△どこまでも

上昇し続けてV消えることのない、△犯すことのできない一つの世界を創るVことがはじめて可能となるのではないか。

ところで、作品冒頭部分に置かれた△伊原Vのノートにおいて、既に、色々なものを眺め、捕まえ、小説に書く際に、△カメラの位置を選んではいけないVという言及がなされている。これは、一見視点の限定を回避することの重要性に關する言及にも見えるが、△伊原Vが最終的に到達した意味での回避とは質的に異なる。以下、△伊原Vのノートにおける△書くVことと、△伊原Vが最後にめざそうと決意した△書くVことの意味の質的差について、考えてみよう。

まず第一に、視点の限定を回避するためには、書き手は、△時間Vに相対化されないような世界を、△書くVことによって、強力に保持して行かなければならない。そうすることによって、△時間Vに支配された世界と、同等の重みを持たせることが出来る。つまり、書き手は、多元的視点を示すためにはむしろ、自己の位置を強力に保持していなければならぬのだ。ところが、ノートにおける△伊原Vの立場は、自己の△立場Vを消し去って、書き手がどこにも位置しない抽象的な存在となることを意味している。そのことは、実は、△黄いろV△膚の色Vや△国籍Vを消し去って、抽象的な存在になってしまいたいという△伊原Vの逃避願望の投影であったことは、△伊原V自身も自覚しているし、△コビトVによっても暴きだされている。

第二に、△伊原Vのノートは△時間Vの観念が、△モンドンVの手記が提示しているものと大きく異なる点をあげることが出来る。△小説の時間は辻褄のあう過去にむいているのではなく辻褄のあわぬ未来にむいているVという時間意識は、開かれた状態を描くという意味で

は意識としては評価できそうであるが、こういった姿勢は、過去をふり返ることを不可能にしようため、△フォンスの井戸Vのような世界は視野からとりこぼされ、射程に入っていない。その意味においては、たとえ建設的な方向には進んで行くことが出来ないまでも、△コビトVのように、過去の位置に立って現在を否定するようなものの方、暗部を覗き込むようなものの方、また、必要なのである。

こうしてみると、△モンドンVの手記は、△伊原Vのノートのもつ限界を明らかにしつつ、△書くVことの意味を△伊原Vに知らしめたのではないだろうか。つまり、△歴史Vや△時間Vの中でとらえるかぎり、我々は△時間Vによる拘束から抜け出すことが出来ないで、△運命Vに取り込まれてしまう。△伊原Vに、その△運命Vから逃れる視点を与えてくれたのが、この、△モンドンVの手記であったのだ。△書くVという行為をこのように理解した上で作品最終場面を解釈するならば、△運命Vの背後にある△巨大な怖いものVとは、秩序化・時間の一元化によって排除され相対化されてしまうような△非情Vなものであり、△運命Vに抵抗する△犯すことのできない一つの世界を創るVとは、△書くVことによって△時間Vの呪縛から人間を解き放つことであるといえよう。

△運命Vもまた、△歴史Vという疑似時間と、集団の利害、価値基準によって生み出されたものであることも、△モンドンVの手記には示されている。△伊原Vの苦悩が△黄色人Vといういわば生得的、運命的なものによっていることを考え併せたとき、△伊原Vが、△書くVことによる△運命Vへの抵抗の路を発見し主体性獲得の方向へむかいはじめることと、△モンドンVの手記とは、あながち無関係では

あるまい。

## 六 おわりに

実際に目を、作品『青い小さな葡萄』そのものの書かれ方に転じて見ると、この作品は、頻繁な視点の移動と位相差による、いくつもの、内面と外面の分離を見出すことが出来る。そして、その錯綜性によって時間もまた錯綜させられ、読者は、作品を、一つの統一した時間の流れのなかで読みすすめて行くことができないように周到に構成されている。また、本作品以後の作品においても、内面と外面の分離や時間の錯綜を描くという方法は、遠藤文学において重要な位置を占めている。このような、作家遠藤の創作方法を加味したとき、この、△伊原▽の獲得した、△書く▽ことによる永遠性をともなった世界の創造という方法は、作家遠藤自身にとってもまた重要な方法であったといえよう。

\*

本稿では△書く▽という行為の意味をといたすために、△コピト▽との差にのみ言及して△コピト▽の役割を否定的に扱ひすぎた嫌がある。しかし、暗部を示し陰在するものを顕現化して行くという△コピト▽の役割りは重要である。また、同時に△ハンツ▽も重要な観念を負わされて作中に登場している。

さらに、コミュニケーションの方法として、△書く▽／読むという方法以外に△語る▽／聞く、△見る▽／見られるという方法も、その機能を分析する必要がある。

また、作品史的に見たとき、△フォンスの井戸▽のモチーフは『フランスにおける異国の学生たち』<sup>(8)</sup>というルポルターージュ風の作品に、また、△モンドン▽の手記で重要な、△集団と個▽の問題等は『学生』<sup>(9)</sup>において追求されている。これらは、『作家の日記——1950・2〜1952・8——』<sup>(10)</sup>において、前者はサドへの傾斜をはじめとする、肉の問題への関心、後者は「エスプリ」運動への接近に伴う実存主義・マルクス主義・人格主義への関心の深まりとともに、探究されていることを指摘することが出来る。こういった、先行する作品との関係も、『青い小さな葡萄』の遠藤文学における位置及び、本作品を執筆した時点での作家の位置を推定する上で、重要な問題である。いずれの問題も、稿を改めて論ずる必要がある。

## 注

(1) 「群像」昭和三十一・七

(2) △神の恩寵に対して、求める方の意志と行為とを重視するのが、彼のカトリック的立場なんでしょう。最後まであの言葉は書き足りていないと思います。▽

△神の不在ということを感じているわけですよ。だから一つの試みとして小説を書こうというとは思っているけれども、それがそのまま不在を解消する創造行為だというふうにはとれなかった。遠藤君自身カトリックだから、「創る」ということに、神を求める能動的な意志と行為とを考えているのだらう▽

(3) △私は、ハンツが求める「葡萄」のほうは宗教の問題で、神

ないし信仰というものがやはり作り出すべきものであるということに認めるが、それは「ハント」の道であって、伊原の場合に書くことに創造を求めるといふふうにとったんですけど、そうじゃなかったですかね▽

(4) 従来遠藤の作品が論じられる場合、挿入された物語切片の扱いは、その内容のみに触れるだけで、切片の生み出す位相差に關しては配慮されないまま、等閑に付されてきた。この問題は、作品のテーマにも深くかかわって行く問題であると論者は考えているが、位相差を捨象して等質な物語内容に還元した上で作品が論じられてきたという事情が、作品を不当に評価させたり、あるいは遠藤文学のテーマが△神▽の問題にのみ限定されて理解されてしまう要因となっているだろう。もちろん遠藤文学を考えて行く際に△神▽の問題を無視することは出来ないが、△神▽を遠藤文学における唯一の条件としてしまえば、作品の豊饒性はそこなわれてしまうだろう。△神▽の問題を考える場合も、作品の全体性を明らかにした上で、最終的にその中に位置付けて行くべきである。

(5) 澤村光博『詩と言語と実存』（湯川書房 昭和53・4）

(6) 武田友寿『青い小さな葡萄』解説（講談社文庫 昭和48・8）

(7) 槌賀七代「『青い小さな葡萄』の世界」（関西大学日本文学会『日本文芸研究』第39巻第2号 昭和60・7）

(8) 一九五一・五「群衆」

(9) 一九五五・二「近代文学」

(10) 一九八〇・九 作品社